

「全十勝の状況報告と現状課題に関する情報交換交流会」

終了報告



8月31日、初となる行政福祉担当者研修会を開催しました。全市町村から30名の皆さんにご参加いただき、研修を行うことができました。今回の研修は、今年の5月から市町村訪問を行い、皆さんからの聞き取り調査を実施した集大成となるものです。行政福祉担当者同士の意見交換の場を求める声が多く、今回の研修企画となりました。障がいをお持ちの方の基本情報はもちろん、訪問の際に伺った工夫や好事例、構想や課題などを他市町村の皆さんと共有することで、課題解決のヒントになることを願って開催に至りました。



19市町村から感じた4つの柱



地域に根差した取り組みを行っている中、十勝管内が大きく4つの特色に分けられると感じました。

- ① 人口規模が少なく、ご本人や町内の資源の状況、相談支援とのかかわりの状況などを包括的に把握し、町内の資源のコーディネート機能になっている
- ② 福祉専門職が配置され、引きこもりなどサービスにつながらない方へのアプローチや町民の潜在的ニーズの掘り起こしを丁寧に行っている
- ③ 町内において、乳幼児健診、発達支援センターや障がい福祉サービス、介護サービスへと情報が引継がれ、一人の方の状況を捉えるシステムができている
- ④ 福祉だけの問題にとどまらず、財政・商工・労政・農政・教育など横のつながりの中で、広い視点を持ち課題解決にあたっている

その特色が活かされた事例の発表をいただき、後半のグループワークへとつなげました。



実数調査データから見えてくるもの

① 手帳取得者数

手帳取得者の内訳やサービスの支給決定数と利用先をデータ化しました。

年齢ごとに数字を出すことで、児童・障がい福祉・介護福祉の利用が予想される方の状況の把握を行っています。また、当センターの守備範囲とする「就労」を切り口として考えた時に、生産人口と呼ばれる年齢層の把握をすることで、マンパワーとなりうる人材数の確認をしました。手帳を所持しながら就労されている方、福祉のサービスを利用している方もいる一方、サービスにつながらない潜在的ニーズをお持ちの方の予測をすることができます。

② 福祉サービス利用数

就労系福祉サービス事業所に支給決定している数字から、自市町村内・外の利用状況をデータ化しました。事業所があれば利用されたであろう人数と、市町村を離れなくてはならない事情が見えてきます。手帳所得者と合わせてみた時に、今後、利用の希望を見込まれるサービスの検討や、障がい福祉サービス事業所があることで地元に戻ることができる見込みのある方など利用数の予測を検討するのに必要な材料として調査しました。また、障がい福祉サービスの給付費は町村の財政においても注目すべき点であり、他市町村へ流れていく費用の動きも読み取るきっかけになるデータです。

3 事例の発表

事例発表①

「福祉専門職配置の視点」

専門職として配置され、地域の方のニーズの掘り起こしのために保健師と連携し、サービスにつながらない方のお宅を一軒一軒訪問したというお話をしてくださいました。町民が顔の見える関係だからこそ、偏見や差別への配慮が重要であるという内容でした。プライバシーを守りながら、その方のニーズに寄り添い、必要な時に必要な情報を提供できる見守り体制は簡単ではありません。事情を知られたくない御家族もいる中、その気持ちに寄り添い、受け入れてもらえるまでの努力は大変参考になるものでした。



上士幌町 保健福祉課
児童・障がい福祉担当
主査 北澤佳隆氏

事例発表②「住民の顔が見える街だからこそできること」

相談支援事業所を町直営で持ち、計画相談の担当をされている方の事例を発表いただきました。町内には地域活動センターしかない状況の中、一般就労経験者など多様なニーズを持つ方が利用されています。グループホーム利用時に計画相談を担当されたことをきっかけに、モニタリングや計画の更新時にご本人の力をアセスメントし、企業就労に結び付けたとのことでした。町内の様々な情報を把握できる役場だからこそ、コーディネートができた事例です。また、就職時には地域活動支援センターの支援者と一緒に企業伴し実習・就職・定着に関わっているお話は、相談支援を大きく超えた内容でした。



鹿追町 福祉課
福祉町民相談係
主任 藤本寛之氏

事例発表③「横につながるからこそできる行政戦略」

本別町の事例は、福祉の枠を超え、町内の課題に対しどのような視点を持ち、対応していくかという内容です。行政機関の皆さんは数年での異動が余儀なくされ、制度や施策の変更についていくのがやっとの状況であるとの声が多いと感じています。そのような中、他の課の経験があるからこそ役場の抱える課題を俯瞰してみることができるメリットを支給決定権者の目の付け所に生かし、戦略的に物事を考えようとされている発想は可能性が広がるお話でした。商工観光課と連携し「空き店舗問題」「後継者不足」「町民の不便さの解消」「福祉サービスへの優先調達」を組み合わせた取り組みは、ほかの市町村へヒントとなる内容でした。小回りの利く町村ならではの視点の持ち方に、後半のグループワークへの良い投げかけになりました。



本別町 総合ケアセンター
高齢者福祉担当 主査 門田浩史氏

グループワーク



① グループ 支給決定権者の目の付け所（若手グループ）

福祉担当経験 1～4 年目のいわゆる若手担当者が集まったグループワークは「日々、“市町村の判断”という言葉に悩まされる」、そんな赤裸々な言葉から始まりました。実際の事例の共有や検討を中心に活発な意見交換があり、「責任ある関わりをしながら、早急に対応しなければいけない」という、状況を知ることができました。

今回をきっかけに近隣市町村に加え、類似した特徴を持つ離れた市町村ともつながりが期待され、今後も交流の場や疑問点を掘り下げる場を望まれているようでした。

② グループ 支給決定権者の目の付け所（役職者グループ）

管理職グループでは、テーマに限らず街の福祉の状況や日々の業務で苦戦しているところや共感できる悩みもあり、話題が絶えないグループワークとなりました。特に「障がい福祉」という部署の名前に関し、お互いの顔のわかる住民性だからこそ、ご本人や家族の抵抗感が強いという話題が出ました。プライバシーに踏み込まれたくないという思いに対し、その繊細な部分にどのように配慮を行い関わるかが課題に挙げられました。グループワーク後半は、障がいをお持ちの方、そのご家族に配慮した手続きの進め方や住民からの要望への対応、社会資源の不足している状況など、各町の行政職員が日々感じていることについて率直な意見が交わされました。

③ グループ 福祉専門職配置の意義と役割

専門職だからこそ、生の意見交換が活発にされたグループでした。専門職配置があることで、個別の対象者との関わりに専門性を発揮できる土台は作られていきますが、その反面で『専門職は何でも知っていると思われるが、万能なわけではない』『一人の価値観(自分の経験のみ)で物事を進めざるを得ない状況に怖さを感じる』という思いや葛藤もある様でした。そのため、専門職同士の意見交換や検討の場の必要性を感じていたり、業務上本来行っていきたい個別の濃い関わりに至りにくい状況がある等のお話もあり、ジレンマを感じながら日々励まれている皆様の姿をお伺いする機会となりました。

④ グループ 横につながるからこそできる行政戦略

福祉の課題を超えた話が飛び交った「行政戦略グループ」は財政・地域作り・広報・商工経験者などが集まる、バイタリティーあふれる内容でした。「財政予算の課題」では、限られた予算を何に使うべきか、就労支援のために年々増えている給付費を、障がい者雇用のためにもっと適切な使い方はできないのかなどの課題が投げかけられました。また「循環型就労系福祉サービスに向けた課題」では、作業能力の高い方が就職することで、福祉サービスの作業活動が立ち行かなくなる実態があり、事業所が手放せない課題と、サービスが利用者の自立を促す場所になっていないのではないかとの問題提起がありました。この時間での話し合いではもったいないほどの内容のため、今後個別のつながりでの相談にも派生する雰囲気を感じました。

⑤ グループ 直営の相談支援の役割とライフステージにおける事例の引継ぎ

日々寄せられる相談の中でも、特に対応に苦慮している事例について共有し合いました。障がい・生活困窮・子どもへの困窮の連鎖など、同時に問題を抱えている方に対して、何からどのように対応していけば良いのか日々思案されている状況は、どの町村にも共通している事例であり、お互いに「わかるわかる！」と共感し合いながら、事例を共有し合う時間となりました。その中で、すべてを 1 人で抱えるのではなく、一つ一つ問題を紐解き、専門職種と連携して役割を分担し「チームで関わる」ことも大切さなのでは、というアドバイスに皆さんうなずいている様子が印象的でした。

構想から 2 年、今年度に入ってからはこの行政研修を目標に、地域を回り、皆さんの声をお聞きし、データを集約してと、当センター一丸となって取り組んだ、今年度の 1 番大きなプロジェクトが今回の「行政福祉担当者研修会」でした。

平成 19 年に開設した当初からこだわって取り組んできた「顔の見える関係づくり」を土台に、今後は皆さんからいただいた沢山の情報を必要としている方たちにつないでいくことが大切だと感じています。

我々のできることは、皆さんからニーズをお聞きし、情報提供や意見交換のできる場を作っていくことです。今回のお声掛けに対し、全市町村から快く参加のお返事をいただけたことは、企画をする我々にとって大変大きな励みとなりました。そして、皆さんが集まり情報交換する場を設けたことで、沢山の共感と今後へのヒントが生まれたことと感じています。

今後の展開としては、今回挙げられた課題に対し、地域で行われる会議等で時間をいただいたり、参加された皆さんからの生の意見をお聞きし下期につないでいくことです。

今回の「行政福祉担当者研修会」がこの回だけにとどまることなく、これからの関係性の構築と、当センターの役割の見直しにつなげ、地域づくりの新たなステージに向かうことが目標です。

お忙しい中ご参加いただいた行政職員の皆さん、誠にありがとうございました。